鉄砲洲神社　論語素読　解説

（平成 21 年 7 月 10 日）

為政第二

４　子曰く、吾十有五にして学に志す。三十にして立つ。四十にして惑わず。五十にして天命を知る。六十にして耳順う。七十にして心の欲する所に従えども矩を踰えず。

ここは私の非常に好きなところでございまして、何か話をする時に、この文章を申し上げる事が多くあります。解説を申します。

孔子が言うには、十代は学に志す年代である。孔子は 15 歳で学問を志したわけです。

二十代については何も言っていません。私は自由に生きれば良いと思っています。自由自在、好き勝手に生きて良いのが二十代だと思います。周りに迷惑をかけても、二十代の人間に対しては、致し方ないなとあまり文句を言われない。

三十代は、男性の場合であれば奥さんを貰い、仕事に就いて一家を立てる年代である。

四十代では、すでに家庭を持っているし、決まった職業に就いて一所懸命仕事をしている年代です。ですから色々と迷う事があるけれども、自分で心に決めた職業だから迷わずに行こうとか、奥さんとずっと添い遂げようと迷わずに決めていくのが四十代です。

私の知り合いの方で、埼玉県の県警本部におられた方の話を致します。その方は論語に関する本も出しているのですが、「四十にして惑わず」とは本当だろうかという事で、埼玉県を調べたそうです。そうすると、確かに四十代は警察の厄介になる人数が非常に多いのだそうです。迷うが故に問題を起こす事が非常に多い年代なので、迷ってはいけないと理解しているとおっしゃっていました。

孔子は迷わず、これで行こうと決めたので、このように書いたのだと思います。

五十代は、諦めの年齢です。良く解釈すれば、自分が生涯を通じて進んでいく道が見える。生涯かけてやる事が決まったと自覚する、いわゆる悟る年代だと受け止めれば良い。逆の意味で言うと、五十代で転職をするのはなかなか難しい。自分の実力もだいたい見えてきて、自分の行く末もおぼろげに見えて来ます。自分の行く所はこれくらいだと諦めの境地に達するのが五十代です。六十代になれば、又、違う感覚になるのでしょうが、五十代の終わり頃にはだいたい諦観・悟りの境地に入ると理解します。

六十代は、人の話を聞いて納得はするけれども、自分の心はそれによって動かされはしない。あなたのいう事は尤もだと聞くけれども、それによって自分の考え方を変える事は

もうなくなるのが六十代です。

七十代になれば、自分のやりたいと思う事を思う通りに行動しても、世間のルールを踏み外すような事はない。孔子の場合は七十代でそういう境地に達したわけです。孔子は自分の思う通りの人生が送れなかったので、五十代から六十代は放浪の旅を続けました。もう自分の言う事を聞いて国づくりに励んでくれるような人はいないと諦めて、弟子を教える道を進もうと思い定めて人生を進んだわけですから、七十代は大体自分の思い通りに、諦めた上の行動に入ったのだろうと感じます。

5　孟懿子 孝を問う。子曰く、違うこと無かれと。樊遲 御たり。子 之に告げて曰く、孟孫 孝を我に問いしに、我対えて曰く、違うこと無かれと。樊遲曰く、何の謂ぞやと。子曰く、生けるには之に事うるに礼を以てし、死せるには之を 葬 るに礼を以てし、之を祭るに礼を以てすと。

孟懿子は、孟孫子のことです。孟孫子が「孝行とはどういうものですか」と孔子に質問をしました。孔子は「違うこと無かれ」としか答えなかった。

孔子は、礼に違わないようにすれば孝行は全うできると答えたつもりなのですが、馬車で帰る時に樊遲という弟子が御者としてついていたので、樊遲に、

「今日は孟孫子から孝行について聞かれたけれども、どうも孟孫子はピンと来ていないようだ。私は一言、違うこと無かれと答えたのだが、分かるかね」と言いました。

樊遲が、「それはどういう意味ですか」と聞きました。

孔子が「自分の親が生きている時には、真心をもって仕える。礼を中心で孝行を尽くさねばならない。親が亡くなった時には、礼をもって葬らねばならないし、祀る場合も、礼にしたがって祀ることだと答えたのだ」と答えました。

つまり、親には孝行しなさい。孝行する場合には、全部、礼に則ってしなさいということなので、分不相応な孝行はしないで、分相応な孝をしなさいと伝えたわけです。

6　孟武伯 孝を問う。子曰く、父母は唯其の 疾 を之れ憂うと。

孟武伯は孟懿子の長男です。孟武伯が孔子に向って同じく、「孝行とは何ですか」と聞きました。

孔子が答えるには、「子供の立場で考えれば、両親が病氣をしないように氣にかけて、常に心配しなさい」と言いました。

これには二説ありまして、もう一つは、「子供は病氣などをして、親に心配かけてはいけない。親に心配をかけないのが孝行だ」と答えたという解釈です。

最後に『論語講義』の中から「吾十有五にして学に志す」の章について、ご紹介します。

各世代ごとに、渋澤栄一さんの書き残している言葉を紹介します。

十代は、親が無理矢理私に学問を授け、剣を授けた。志すというより自然とそういう環境にあったから勉強を始めた。

四十の不惑の境涯は、自分自身で考えてみるに、七十代に入ってから、やっと手に入ったように思う。

天命を知る五十代は、84 歳の時に自分自身の一生を省みて、自分は官職にはつかないと決めた事を一貫して貫いた。これは天から、民間で生涯を過ごしなさいと言われたようなもので、それを貫いたのだと振り返ってみると言える。後半になると、東京市の市長や大蔵大臣になったらどうかと周りから勧められたけれども、皆断わった。断わって民間で一生過ごしたのは、天命を全うしたと言っても良いだろうと思っている。

六十代の耳順も、だいたい七十前後から、人さまの言う事でころころ氣持ちが変わる事はなくなった。だから自分がまあまあものになってきたのは、七十過ぎてからだ。

最後の七十代については、八十四歳になった今でも心の欲するままに行えば、たいてい矩は超える。必ず乱行となるであろう。それをしないのは、克己（自分自身の自制心）の賜物であると書き残しています。「乱行となるであろう」と渋澤栄一さんが文章で書いているのは、自分に対して敵対する者たちと相対して、相手を殺して自分も死ぬとか、相当な大怪我をするという内容で書いています。面白い事に、『論語講義』では自分自身の下半身のことについては書いていませんが、そちらの方の克己心はなかったと、他の文章を読むとありありと出ています。やはり自分で残した文章には、都合の悪いものは書かないのだと思いつつ、八十四歳の時でも、心の欲するままに動けば、相当問題を周りに巻き起こす事になるだろうと書いているところが面白いと感じます。

本日は以上です。有難うございました。